



# EAPEA ニュースレター

2013年1月15日  
第5号

発行元：NPO 法人東アジア政経アカデミー

発行元連絡先：〒168-0082 東京都杉並区久我山 4-38-14 電話&FAX:03-3332-8433

URL: <http://www1.ocn.ne.jp/~eapea/> e-mail: [eapea@diary.ocn.ne.jp](mailto:eapea@diary.ocn.ne.jp)

## この号の内容

- 1 ■日韓新政権に望む！  
(永野慎一郎)
- 木浦市立交響楽団東京公演！
- 2 活動報告①
- 第5回日韓政策フォーラム
- 東京王仁ライオンズクラブ講演
- 田内千鶴子生誕100周年記念行事
- 河正雄理事の故郷霊岩に河美術館開館
- 韓国における経済と生活実態について思うこと (大杉由香)
- 3 会員からの便り
- 新しいリーダーに期待する (松浦勉)
- 尹鶴子女史生誕百年に参加して (水上洋一郎)
- 時刻表廃刊と私の昭和 (薄葉威士)
- 4 活動報告②
- 東アジア経営学会国際連合第11回大会に参加 (貫隆夫)
- 昨年の日韓交流 (佐々木憲文)

編集後記

## 日韓の新政権に望む！

東アジア政経アカデミー代表 永野慎一郎

日本と韓国の指導者交代で、日韓両国は新年早々から新政権が船出する。北朝鮮の金正恩体制は別として、習近平中国共産党総書記の登場、日本の安倍晋三政権誕生、韓国の朴槿恵大統領当選など役者が出揃った。いずれも2代目、3代目の世襲である。保守回帰とも言えそう。朴槿恵氏は東アジア初の女性大統領、初の親子大統領。儒教思想の強い国で女性が大統領に選ばれたので異例として受け止められている。時代の変化を感じる。女性の感性で時代を超えた政策遂行を期待したい。

東アジアを取り巻く国際環境は依然として厳しく、難題山積。21世紀は東アジア時代と言われて久しい。地域の平和と安定は最優先課題である。平和と安定を確保した上で、共生共栄の道を探らなければならない。日本と韓国が歴史問題や領土問題の対立で前に進めない状況は好ましくない。歴史認識や領土問題はそれぞれの国民感情があり、譲れない事柄である。しかし、外国との関係になると、正反対の世論が相手側にも存在していることを認識すべきである。相容れない世論をいかに調整して解決に導くのかはトップリーダーたちの政治力にかかっている。

真の国益は目先の利益ではなく、将来を見据えたより大きな利益を永続させることである。日韓両国は自由と民主主義、市場経済の価値観を共有している友邦であり、経済的に相互依存関係にある。日本の繊細な技術および経験と韓国のダイナミックな行動力をコラボして補完し合えば、両国ともより大きな国益が期待できる。歴史認識も領土問題も100年前に発生した歴史的な産物である。そろそろけじめをつけて21世紀の新時代に即した新しい関係構築を考えるべきであろう。

## 木浦市立交響楽団東京公演！

韓国・木浦市立交響楽団が文化庁芸術祭に招待され、10月2日(火)午後7時から、東京オペラシティコンサートホールで公演した。「アジアオーケストラウィーク2012」平成24年度(第67回)文化庁芸術祭主催公演として行われた。第1曲目バク・ボムフン「サムルノリと管弦楽団のためのシンモドゥム」は、韓国の伝統楽器を取り入れた作品であった。力強い演奏が会場を魅了した。2曲目ベートーヴェン「ピアノ協奏曲第3番」、3曲目チャイコフスキー「交響曲第4番」が終わると、アンコールの拍手に迎え、「木浦の涙」と日本の民謡をアレンジした外山雄三の「管弦楽団のためのラブソティー」の演奏で観客は大喜び。25万の都市に市立交響楽団の存在は立派。団員の75%は女性、30歳前後の若い人で構成。木浦市には6つの文化芸術団体があるとわざわざこの演奏会のために来日した丁鍾得木浦市長は話していた。



坂本健板橋区長と  
丁鍾得木浦市長



丁鍾得木浦市長板橋区訪問



丁市長と  
木浦市立交響楽団指揮者夫妻



左から永野代表、木浦市長、  
衛藤征士郎衆議院副議長

## 活動報告①

### 第 5 回日韓政策フォーラム

第 5 回日韓政策フォーラムが 11 月 6 日、早稲田大学で開催された。韓国統一研究院、早稲田大学アジア太平洋研究センター、東アジア政経アカデミーの共同主催によるもので、「北朝鮮の変化と日韓の政策協力」をテーマに、70 余名の朝鮮半島研究者が集まって活発な議論が展開された。永野慎一郎代表は第 2 セッションにおいて討論者として、また、総合討論司会者として役割を担当した。第 1 回から第 4 回までは、信濃町の大東文化大学法科大学院会議室で行われた。

### 田内千鶴子生誕 100 周年記念行事

2012 年 10 月 29-31 日、木浦共生園の孤児 3000 名を養育し、孤児の母と呼ばれていた田内千鶴子生誕 100 周年記念行事がソウルと木浦で行われ、日本からも 500 余名が参加した。

10 月 29 日午後 2 時からソウル女性プラザ国際会議場において開会式、国際学術シンポジウム、文化交流の夜などが行われた。会場を田内女史の縁のある木浦に移動し、30 日と 31 日は木浦市民体育センターを主会場に、愛と平和の祭典、田内千鶴子女史生誕 100 周年記念式典および祝賀公演が行われた。日韓の市民約 1500 名が参集し、田内千鶴子（韓国名尹鶴子）さんの功績を讃えると共に日韓の交流を確かめ合った。

### 東京王仁ライオンズクラブ講演

永野慎一郎代表は、11 月 20 日（火）18:00 から ANA インターコンチネンタルホテル東京で開かれた東京王仁ライオンズクラブ（会長沈広燮）例会にゲストスピーカーとして招かれ、「北朝鮮の変化で日韓は何をすべきか」と題して講演した。

東京王仁ライオンズクラブは、東京周辺に居住している在日韓国経済人有志が加入しているライオンズクラブで社会的奉仕活動をしている。南北関係、日韓関係、統一問題、最近の政治や経済情勢などについて講演し、意見交換が行われた。

### 河正雄理事の故郷霊岩に ‘河美術館開館’

当アカデミー理事河正雄氏は美術品コレクターとして知られている。収集した美術品のほとんどは韓国各地の美術館に寄贈してきた。寄贈美術品は数千点である。

1993 年光州市立美術館への寄贈から始まる。光州市立美術館には延べ 2,300 点を寄贈し、その功績によって光州市立美術館から名誉館長に委嘱され、また、光州の朝鮮大学から名誉美術学博士学位を授与された。

2012 年 9 月 3 日、河さんの故郷全羅南道霊岩郡に霊岩郡立河美術館が開館した。霊岩郡は郷土の誇りである河正雄を記念するために郡立美術館を建立した。河さんは当美術館に 3,000 余点の美術作品を寄贈した。

## 韓国における経済と生活実態について思うこと

大東文化大学准教授 大杉由香

2012 年 6 月 23 日、私は東京グリーンパレスで行われた公益社団法人中央日韓協会の総会において、「韓国における経済と生活実態」というテーマで講演を行った。私は韓国経済の専門家でないから、どれだけ韓国の生活問題に踏み込めるか自信がなかったが、その一方で、最近日本で語られている韓国の姿が過大評価に思っていたこともあって、これを糺す意味でも良い機会と考え、お受けした次第である。以下、その概要等を述べたい。

端的に言えば、韓国は日本と異なり未だに財閥による経済独占状態が続いており、それは何か危機に襲われた際にスピーディに対応するには悪くないものの、他方でこうした体制は容赦ないリストラや実質賃金低下をもたらし、一般の人々の生活を圧迫していると言っても過言ではない。現に企業の中では苛烈な能力主義が横行して、実質 38 歳定年になっており、しかも日本と違ってある日突然解雇を言い渡されて、即刻辞めさせられるケースも多い。こうした傾向はアジア通貨危機以降に顕著化し、人生での稼働期間が 20 年程度になりつつあるが、とはいえ、こうした排除を受けた人々への公的なセーフティネットは日本以上に不備なままである。それを象徴するかのよう、2011 年 2 月 23 日付の『サーチナ』では、韓国人の会社員の 7 割が移民可能であれば韓国から離れたいと報道しており、

韓国人の多くが強いストレスを感じて生活していることが窺われる。裏返して言えば、韓国人がウリ（我々）と見なした人たちに熱烈とも思えるほど情を注ぐ一方、ナム（他人）には冷淡で、時には攻撃的な態度で臨むというのも、こうした社会の歪みの表れと言える。

確かに半世紀前にはガーナと同水準に過ぎない 1 人当たり GDP（156 ドル）が現在では日本の半分程度にまで追いつき、英『エコノミスト』編集部が出した『2050 年の世界 英『エコノミスト』誌は予測する』、文藝春秋、2012 年でも、購買力平価ベースの 1 人当たりの GDP について、2050 年には韓国が日本の倍になると予測されるほどになった。だが、上記のような格差拡大に加え、急激に進む高齢化や北朝鮮という地政学的リスク、日本と比較してはるかに高い貿易依存度を考える時、私は素直に日本経済の立て直しに際して韓国を手本にすべきとは到底言えない。ただ、2012 年末の日本の衆議院選挙や韓国の大統領選挙を見ても、人々が社会に閉塞感を覚えて変化を求めている点は日韓ともに共通しており、今後は「経済栄えて国民滅ぶ」といった状況に対し、日韓合同で互いに知恵を出し合うことが求められよう。その意味でも現在冷え込みがちな日韓関係の改善を心から望みたいものである。（当アカデミー理事）

## 会員からの便り

### 新しいリーダーに期待する

前板橋区福祉部長 松浦 勉

今年 2013 年は、日中韓の新しい指導者による東アジア外交がどう展開されていくのか、大いに注目される年である。とりわけ、尖閣や竹島の問題をどう扱い、自国のみならず東アジア地域の安全と発展を確保していくのか、リーダーたちの手腕が問われる。

領土問題というものは、二国間で解決するのは甚だ困難な事柄と言われている。それぞれに主張の根拠があり、また国家の威信が前面に出て行くからだと思う。しかし、昨年の中・日韓関係をみても、この問題が経済、社会の大きなマイナスになっていることは明らかである。徒にナショナリズムを掻き立てる輩に指導者は踊らされるべきではないと考える。

昨年 8 月の板橋区議会韓国訪問が流れたのも、竹島問題の余波だった。訪問先の木浦市も板橋区側でも、ギリギリまで実施の可能性を探る努力がされたものの、最終的に安全が確保できないという理由で中止を余儀なくされた。2011 年から始まった両市の訪問交流でいい関係が育ってきただけに、大変残念なことであった。しかし、これで関係が断ち切れたわけではなく、時期を選んでの交流再開に期待がかかる。韓国・木浦市とのつながりは、板橋区そして双方にとり必ずプラスになると信じるからである。

東アジア共同体構想が、かねてから語られながら進展しないのは、地理や文化などにおいて欧州とは基盤が違うからと言われる。しかし、遠い親戚より近くの他人というように、隣人と仲良く付き合うことは現実社会を豊かに暮らす秘訣である。悲観的な観測が多い中あえて、各国リーダーが、国を治めつつ東アジア地域の互惠関係向上をはかる「初夢」の実現に進んでいくことを期待したい。

### 尹鶴子女史生誕百年に参加して

日韓文化協会顧問 水上洋一郎

昨年 10 月 31 日、私は韓国木浦市で開催された尹鶴子（日本名田内千鶴子）生誕百年記念式典、「国連世界孤児の日」制定推進大会に参加しました。日本生れの尹鶴子は三千人の孤児を育て、「韓国孤児の母」として知られています。会場には日韓から多くの人たちが集まり、尹鶴子への敬慕の気持ちを表わし、家族や地域、さらには国の境界を越えた人間の愛の力を感じたと思います。ただ、少し残念だったのは、日本から在日の人を含め五百名もの方が参加していながら、大会で配られた冊子、記念事業会主催の名簿の中に日本人、日本側の名が見当たらなかったことです。東京でも事業発起人会が開かれたと聞いていたので、絶好の日韓共同事業の善き意図が薄れていたように見えました。ここからは推測です。直前の、或いは未だざわめき立つ日韓の荒波が関係者に波及したのかと思いました。

さて、頭の体操です。利害関係のない第三者、第三国が今の日韓関係を見た場合、どのように感じるでしょうか。両国はアジアにおいて戦略的に、その他、種々の点で利害が一致し、先進国として共通の価値を持ち、文化的にも非常に近いにもかかわらず、100 年の前の過去が原因して互いに未だ角つき合わせ、いさかきをしていると、本当に不思議に思い、あきれてしまうのではないのでしょうか。未来志向の一つが日韓共同して国際社会に貢献するイニシアティブであり事業でしょう。

「国連世界孤児の日」制定が成功することを祈っています。

### 時刻表廃刊と私の昭和

中央日韓協会理事 薄葉 威士

今年(2012 年)の 7 月にソウルのキョボムンゴ(教保文庫)という大きな書店で、鉄道の時刻表を買い求めようと店員に尋ねたところ「もうない、廃刊になった」という答えが返ってきた。現在手元にあるのは 2012 年 4 月版だが、どうもこれが印刷物としての最後の時刻表になるらしい。日本では、時刻表といえば大判、中小判を含めて十指に余るほど出版されている。木浦へ、春川へ等々在来線の高速鉄道化が進んでいる韓国で、なぜだろう。

何年も前になるが、韓国で知り合いの学生に「時刻表はどこの本屋で売っているか」と尋ねたことがあったが、その学生は「そんなもの、なぜ必要なのか」と怪訝な顔をして「インターネットですぐわかるじゃないか。第一、時刻表などという本があるのか」と逆に聞かれる始末だった。

日本人、特に我々中年世代の持つ、時刻表のページをめくりながら、まだ行ったことのない街、まだ見たことのない土地に思いをはせ胸ときめかせるようなことは韓国人学生には理解できないのだろう。彼らは本の代わりにパソコンの画面、スマホの画面を見ながら胸をときめかせるのだろうか。

今手元に戦前の朝鮮半島の時刻表「朝鮮列車時刻表(昭和 13 年 2 月号)」の復刻版がある。東京から下関、そして釜山、京城(ソウル)、平壤(ピョンヤン)、満洲(中国)の新京(長春)へというように長距離列車の時刻が記載されている。今、東京からソウルまでは飛行機で 2 時間程度。戦前は関釜連絡船を乗り継いで 1 日半から 2 日。飛行機ではないまでも、釜山—ソウルは現在は KTX で 3 時間弱。当時は特急でも 8 時間から 9 時間の行程。戦前の人たちはどんな思いで日本—朝鮮(韓国)を行き来していたのだろうか。

李方子も英親王も徳恵翁主も、そして伊藤博文も皆この京釜線に乗って朝鮮から日本へ、また日本から朝鮮へと行き来したのだろう。

日本が権勢を誇っていた時代の朝鮮総督府の建物は今はなく、ソウル市庁舎も、一部は残されているものの超近代的なガラス張りの建物に代わっている。ソウル駅も同様にモダンな駅舎になり、旧駅舎は他の用途に代わるべくひっそりとそばにたたずんでいる。韓国の時刻表が消えていくのと同じように、日本統治時代の面影もどんどん遠くへと去っていく。

それに反して、明洞は韓国ドラマ好きの日本人中年女性や若い女性であふれ、そして韓ドラ撮影地に押しかけていく。また、大統領選挙のポスターの前を高笑いしながらグループで通り過ぎていく。これが新しい時代の到来というものなのか。

## 活動報告②

### 東アジア経営学会国際連合第11回大会(中国南京市)に参加

武蔵大学名誉教授 貫 隆夫

2012年10月27～29日の期間、中国南京市の河海大学で標記の大会が開催されました。前回はソウルでしたが、今回の大会は前月に尖閣諸島をめぐる日中のトラブルから反日デモの嵐が吹き荒れた後であり、日本からの参加者には幾人かキャンセルが出るなど、開催できるかどうか危惧されました。私も家族から心配されながら参加しましたが、開催校の大学キャンパスのなかで行動する限り、学生達も親切で何の問題もなく過ごしました。3日目の懇親会の夕食で隣に座った中国側のスタッフに、「日本を出発する時、しっかり傷害保険に入って行ってね、と家内に言われましたよ」と話したら、「うちの大学のキャンパスで敵意を感じる視線を受けましたか？そんな事は無いはず。領土問題は政治家の問題です」という答えが返ってきました。南京の観光は中国人の教授が同行してくれたので市内を一人で歩いたわけではありませんが、特に緊張する場面はまったくありませんでした。0.4以上が社会紛争が多発する警戒ラインとされるジニ系数について、中国は0.61(2010年)と世界最悪レベルに達する格差社会であり(西南财经大学と中国人民銀行の共同調査による)、大学のキャンパスと一般市民の意識を同じに見ることはできませんが、日本人がラーメンを掛けられたなどという新聞で報道される事件は中国全体の人口規模からすると極めて稀なケースであるように思いました。

中国における反日デモの背景には拡大する格差への不満があると言われますが、アジアにおける経済的交流の促進によって経済成長をはかり、低所得層を含めた全体の底上げを実現することは中国社会の安定のための重要な条件であるはず。政治的対立のために経済および文化の交流が阻害されることは中国と日本にとってだけでなく、他のアジア諸国にとっても大きな損失です。大会の全体テーマは、「東アジアにおけるWin-Win 関係構築のための経営革新」というものでしたが、経済的視点に照らして領土紛争をめぐる政治的対立がいかにも Lose-Lose な結果をもたらすものであるのか、誰の目にも分かるように説明する必要があります。領土問題は国家のアイデンティティ、面子にかかわる事柄だけに双方とも譲ることのできない厄介な問題ですが、そこに一人も住んでいるわけではない小さな島をめぐる争いで13億4千万人(中国)と1億2千万人(日本)の国民が大きな逸失利益を負い続けるのも愚かな話であります。政治家の力量不足で生じる国内の不安定を対外緊張によってカバーしようとする潮流を変える努力が求められています。(次回の大会は2年後にハノイで開催予定)。

(当アカデミー理事)

### 昨年の日韓交流—茶の湯を通じた文化交流

佐々木憲文

2012年は政経交流ではありませんが、小さな文化交流—茶の湯を通じた日韓茶人の集まりを山口で企画しました。韓国から9名、日本側20名に参加していただきました。茶人といっても専門家だけでなく、茶を喫むことが好きな人です。日本の若い参加者を中心に、今度は韓国で茶会をやりたいとの声も上がりました。指導者のお一人は、交流の継続化が使命ともおっしゃってくださいました。茶会の別れの時に、韓国側参加者から突如、「マンナム(出会い)」の歌声が響きはじめました。満月の夜、感動的な交流でした。

韓国では、李朝時代の仏教弾圧の影響で、茶もかなり衰退しました。盛んになってまだ、20年前後ぐらいのように思えます。特にここ数年は、かなり華やかにさまざまな先生が(流派のようなものを立て)それぞれの思いで広めておられます。韓国では茶禮(サ・レイ)といい、正月や秋夕(日本のお盆)に先祖や父母への礼儀作法の一環としての役割を担っています。ただそのような堅苦しい茶の湯ではなく、「喫茶去」の心で気軽に楽しく自由に喫む“茶のある生活”への関心が高まっています。故・法頂和尚(『無所有』『すべてを捨てて去る』等)は、「チャ・ナ・マシゲ(茶でも喫んで)」と好んで揮毫され、まさにその精神で、お茶を喫んで非日常の世界へ遊ぶと、しばし心のゆとりが得られます。在韓中にご指導いただいた金淡然堂先生は、経済成長とともに急激に崩壊していく韓国伝統の禮を残そうと、現代の生活に無理なく合うように「茶禮」として創作・工夫されています。だから初めての人(作法を知らない)でも、茶をいただくうちに、茶味(靈気?)に導かれ、何となくゆったりとし、自由な語らいがはじまります。茶味・禅味が感じられます。また、もてなしの心の優しさ、奥深さ、楽しさ有難さなどを知ることができます。杓子定規な自国(自己?)の言い分のみの応酬により、ますます険悪化する日韓関係は、この茶の心を喪した所以と痛感した交流会でした。むしろ抹茶を喫まなくても、その心を!ということ。因みに韓国で茶の湯とは、抹茶より煎茶の方が一般的で、なかなか香りも味もよく、洗練されています。

2013年を迎え、せめて個人としては、茶の心をもって交流を深め、広め、日韓の友好に微力ながら尽くしていきたいと思っています。よい1年になりますよう祈念しつつ…。

(当アカデミー監事)

#### ■編集後記

昨年は日中韓の関係は今後どうなるのか、心配させられた年でしたが、各国で政権が交代した現在、関係改善に向けて進みだして欲しいと思わずにはいられません。その意味でも会員の先生方の民間交流活動は意義深いものだと感じます。いずれにせよ、この度もご多忙のところ、貴重な御玉稿をお寄せ下さった先生方に厚くお礼申し上げます。(大杉由香)